CLA 関東支部支部長挨拶

光益尚登（ミツマスヒサト） 株式会社 虹設計事務所

平成 30 年 4 月に関東支部支部長を仰せつかり、約半年が過ぎようとしています。

今回の執行部は、協会及び支部活動の経験が豊富な方ばかりですので、順調な滑り出しとなっています。出身会社では重責を担い、また仕事が大変忙しい中、支部活動に熱心に取り組んでいただいています役員・委員皆様には大変感謝しております。

私自身の関東支部での活動も、早 20 年が過ぎてしまいました。今まで支部活動に従事し、様々なことを経験し学ばせていただいたことは、支部の先達・先輩・同僚皆様のおかげと大変感謝しております。今までの関東支部の歴史と活動を次世代に伝え継続させていくことで、少しでも協会の発展に貢献することが出来ればと思っております。関東支部会員及びランドスケープコンサルタンツ協会に関係する皆様のご理解、ご協力、ご支援をお願いする次第です。

関東支部範囲の自治体での予算や発注は、おおむね順調のようでありますが、受注の現場では低価格入札が続くなど、支部を取り巻く情勢は依然として厳しい状況が続いています。

また東京オリンピック・パラリンピックを 2 年後に控え、関東支部会員が果たして行かなければならない役割はこれからも益々増えてくるものと推測されます。このような状況の中、関東支部会員皆様が活躍できるような環境づくりを進めていくために、支部役員及び委員は、精一杯頑張って行かなければならないと思っております。

今期の主な支部活動計画は、以下の通りです。

- ランドスケープコンサルタンツ協会の会員名簿・業務報酬積算ガイドライン等の営業ツールの配布を行うことで、協会の PR 活動を推進していく。
- 発注団体との意見交換会や技術研修会等を開催し、協会員との交流・連携、情報提供・情報発信を推進していく。
- 支部特有の技術研修・セミナー・イベント等を開催し、支部会員の交流・懇親を深めるとともに造園 CPD 単位所得のための支援を推進していく。
- 支部情報誌「みどりの手帖」発行と支部ホームページの充実により、支部の広報活動を推進していく。
- 東京オリンピック・パラリンピックに向けた協会活動を支援・推進していく。
- 日比谷公園ガーデニングショー 2018 の協賛と実行委員会への委員派遣等によりガーデニングショー開催を支援していく。

これらの活動を推進していくことにより、支部会員皆様に役立ち、また新たな仕事の展開に貢献していきたいと考えています。

登録ランドスケープアーキテクト(RLA)のご紹介

登録ランドスケープアーキテクト（略称 RLA）について色々ご紹介するために、本欄を設けることとなりました。どうぞ、よろしくお願いいたします。

ランドスケープとは、英語で「風景」や「景観」を示す言葉で、トランプ大統領も「錆びた工場が広がっている」というフレーズをランドスケープと表現していました。アーキテクトは「建築家」ですので、ランドスケープアーキテクトは「景観建築家」あるいは、小林治人氏が提唱している「設景家」が、すんなり理解できそうです。ニューヨークのセントラクパークを作ったオルムステッドが、自らの職能を「ランドスケープアーキテクト」と名乗ったのが最初とされています。

日本では「造園」という言葉が定着していましたが、「植木職人」や「庭師」というイメージと重なる部分も大きく、空間デザインを主体としながらも、環境調査やマネジメントといった領域への拡大を踏まえて、ランドスケープという言葉が用いられるようになりました。登録ランドスケープアーキテクト（略称 RLA）は、日本で当該分野を担う唯一の資格です。今後、世界の同等資格との相互認証も目指しており、世界へと羽ばたいてゆくことも期待されています。次回からは、登録ランドスケープアーキテクトが行った仕事を紹介しながら、その魅力をお知らせします。ご期待ください。

いきものコラム その 23　ニホンリス「森のエビフライ」

パラリンピックでのマスコットの歴史が始まったのは、今から 38 年前の 1980 年にオランダのアーネムで行われた第 6 回パラリンピックのこと。オランダの放送局のひとつである AVRO がマスコットの公募を行い、地元出身の Necky Oprinsen 氏が考案した 2 匹のリスのマスコットが採用されたそうです。今回はパラリンピックのマスコットに因んで、日本のリスの話をご紹介します。

これから秋～冬に向けて山野を歩いていると奇妙なものを見つけます。まつぼっくりが中心の軸を残して鱗片葉がむしりとられ、種子が全て食べられているのです。これを哺乳類研究者は「エビフライ」と呼びます。また近くにはクルミの種子が中心線に沿って真二つに削り割られているものもあります。これはニホンリスの食べ痕です。リスは秋から冬にかけて植物の実や種子を大量に食べ集めます。それも器用に残さず食べるのです。食べ方は動物によって様々です。同じクルミでもアカネズミは、直径 1cm の穴を側面から開けて中身を食べます。ニホンザルは柿やアケビなどの果実を一部かじってはすぐに捨てる性質があります。サルが柿をカニに投げつけるという描写が昔話「サルカニ合戦」にも出てきますよね。これはサルのこのような性質を現しているとも言われています。動物には固有の餌の食べ方があります。一見動物なんていないような林の中にも、意外とこういった食痕が見られます。私はこのような食痕を見つけた時、ここでせっせと殻を割り、黙々と食事をしていた先客を思い浮かべては、その姿を微笑ましく思うのと同時にその器用さに感心してしまいます。　㈱プレック研究所　大森 鑑能

リスの食痕「エビフライ」

気になるお店

テーマにちなみ、障がい者の雇用促進する、わーくはぴねす農園船橋ファームを紹介します。

わーくはぴねす農園船橋ファームは、企業と障がい者を結ぶ㈱エスプールプラスさんが、企画・運営する、約 20 社の企業が管理する農園の集合体です。ここでは約 100 名の、主に知的障がいを持った 18 ～ 60 才位まで様々な年齢の方々が働いています。この会社は、（一社）全日本知的障がい者スポーツ協会のオフィシャルスポンサーでもあり、今回テーマの障がい者スポーツとも深く関連しています。

この農園では、3 人の障がい者に 1 人の管理者をチームとし、1 畝の農作業を個々のレベルに合わせ行い、成果品は収穫祭や企業の研修・厚生・社会貢献として活用されています。

企業側の障がい者を活用したい思いと、働きたい障がい者をつなぐ農園となって、いま注目の新しいビジネスモデルとなっています。

取材に行ったときには障がい者の笑顔と小ぶりのなすがありました。

農園は千葉中心に 13 箇所に展開・拡大中で、自治体からも相談があるそうです。

10 月には松戸にも新農園がオープンされ、新たに60名の障がい者の雇用が実現されます！

ファーム入口

農園内風景

笑顔

かわいいナス

住所 ● 〒 274-0817
千葉県船橋市高根町 595-1
電話 ● 047-406-6061
作業時間 ● 9:20~15:00
※一般には開放してませんが、見学は事前申し込みで可能です。
本社 ● 千代田区外神田 1-18-13 秋葉原ダイビル
03-6859-6555
ホームページ ● https://plus.spool.co.jp/

編集後記

西暦 2020 年に、世界的なスポーツの祭典であるオリンピックが、東京で開催されます。開催地となったことを契機に、今回はパラリンピックにスポットをあて、特集しました。パラリンピックの歴史、障がいの度合い、そして障がい者の生活の様々な課題などを改めて認識することができました。それと共に、その環境整備の重要性と必要性を改めて考えるいい機会となりました。ランドスケープデザインへの更なるアプローチとしたいと思います。最後に講演をしていただきました水原由明さんに、厚く御礼申し上げます。（加藤）

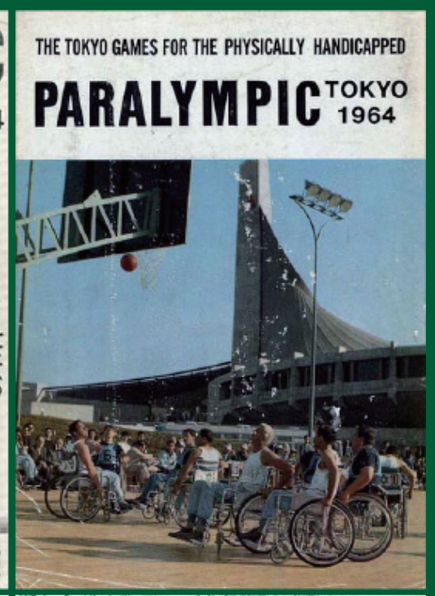
みどりの手帖　Vol. 23　2018 年 9 月
発行者　（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関東支部長　光益 尚登
〒 103-0004　東京都中央区東日本橋 3－3－7　近江会館ビル 8 階
TEL 03-3662-8266　FAX 03-3662-8268
企画・編集　菊谷 隆、加藤 直人、石垣 良弘、新井 深、泉地善雄

※転載・転用を禁じます。表紙写真／パラリンピックトウキョウ 1964 のポスター等　タイトル写真／「障がい者にスポーツに関する講義会」風景
表紙写真・特集の写真は（公財）日本障がい者スポーツ協会提供

CLA
Consultants of Landscape Architecture in Japan
（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会関東支部
Consultants of Landscape Architecture in Japan

CLA 関東支部情報誌
Vol.23 2018.9

みどりの手帖



特集
ランドスケープのしごと
「障がい者スポーツとランドスケープ」
水原 由明さん　公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 推進部長

CLA関東支部支部長挨拶

ランドスケープのしごと：

障がい者スポーツとランドスケープ

特　　集

平成 32 年（2020）東京オリンピック・パラリンピックも迫ると共に、高齢者社会に入った現在、もう一度ユニバーサルデザインに関する知見を深める必要があると考えます。今回は、第 1 回 CLA 関東支部特別セミナー「障がい者スポーツに関する講演会」として、講師に一言太郎氏（国土交通省都市局都市計画課 課長補佐）と水原由明氏（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会スポーツ推進部長）をお招きして障がい者スポーツについての最新情報を学びました。本特集号では、水原氏の「障がい者スポーツの新たな展開」を紹介し、今後のランドスケープの役割を再度考えたいと思います。

障がい者スポーツの新たな展開

公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会 推進部長
水原 由明 Yoshiaki Mizuhara

水原 由明さん
1976 年順天堂大学体育学部卒業
2009 年公益財団法人日本障がい者スポーツ協会養成研修部に入職し現在に至る。2004 年アテネ・パラリンピック日本女子車椅子バスケットボールヘッドコーチ。現在も地域にミニバス、都内の車椅子バスケットボールの指導等活動を行っている。

● パラリンピックのはじまり

昭和 39 年（1964）の東京オリンピックのあとにパラリンピックが開催されましたが、知らない方も多いのではないでしょうか。恐らく情報が全くなかったからだと思います。

パラリンピックの起源は、ロンドンオリンピック開会式（1948 年 7 月 28 日）と同日に、英国のストーク・マンデビル病院で行われたストーク・マンデビル競技大会と言われています。その後、東京でパラリンピックと名付けて開催したという歴史があります。

当時は車椅子だけのものでした。「パラプレジア（下半身不随）」の方の競技大会なので、「パラプレジア」と「オリンピック」から「パラリンピック」と呼ぶようになったと言われています。現代では、「パラレル（もう一方）」の「オリンピック」という意味合いで「パラリンピック」と言うようになってきました。このように昔と今日で若干意味合いが変化してきました。

東京パラリンピックの時の写真をご覧頂けるとわかりますが、当時はスポーツ用の車椅子はなく、競技でも一般の車椅子を利用していました。病院に通院しているとかリハビリテーションの延長線上にスポーツを取り入れた人達が選手となっていました。特に、日本選手はほとんどがそのような方々だったと伝えられています。

●近年の障がいの多様化

今日、いろいろな障がいがあり多様化しているとともに、重度化してきています。

障がい者＝車椅子ではないという事をご理解頂ければと思います。

安全管理の側面からは、危険であることを知らせる工夫や制限区域を知らせる工夫が必要となってきています。

また、大きな災害があった時にはどうしても障がい者が最後に残されてしまう傾向にあり、いろいろな状況を考えた対応が課題となっています。障がいの概要を紹介します。（上図参照）

［三障がい］	［障がいの概要］
身体障がい	肢体不自由
	視覚障がい
	聴覚障がい
	内部障がい
知的障がい	知的機能の障がい
精神障がい	脳の機能的・器質的障がい

一口に障がいといっても多様性や重度なのか軽度なのかもあり、様々であるということをご理解頂きたいと思います。

●第 2 期（2017 ～ 2021 年）スポーツ基本計画の概要

近年、スポーツ庁では「スポーツの力を高める」を目標に掲げ、障がい者のために何かできないかという大きな動きがあります。国民の健康、そして長寿社会に向けて、『スポーツで「人生」が変わる』『スポーツで「社会」を変える』『スポーツで「世界」とつながる』『スポーツで「未来」を創る』等、夢多き言葉ですが実際は、国民の健康をどうするかを考えないといけないのではないかと思います。

スポーツ経験者が、スポーツを通じて皆さんに何かを伝えることができるとすれば、「個人で健康管理ができるようにして下さい」とか、いろいろな場所でもスポーツはできるもので、もっと身近にあるものというスポーツの捉え方を広げていくことが重要です。

どうしても「障がい者のスポーツ = パラリンピック」というイメージがありますが、スポーツは皆さんが楽しむためにあるものという解釈を進めないといけないと思っています。

● 障がい者とスポーツの関わり方

障がい者数は、936 万人と言われていますが、その中で身体障がいが 436 万人、その中でも 65 歳以上の方が 72.6% を占めます。おそらく 2020 年を過ぎたら 80% 近くの方が 65 歳以上の方で、20% の中からパラリンピックに参加するような構図となるでしょう。

今、日本では、2020 年の選手になれるのは 200 人前後（肢体不自由、視覚障がい、一部知的障がい）です。その他多くの方は応援する側です。

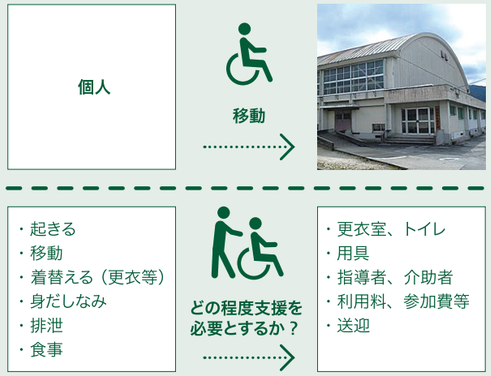
これから、いろいろなスポーツ大会が開催される予定で、それに伴い環境をどう変えていくのか、どう変化するのか。ただ、大会の後に何を残すのかが具体的になっていないのが現状だと思います。

1964 年のオリンピック・パラリンピック後に残されたものは、日本身体障がい者スポーツ協会の設立、障がい者スポーツの指導者制度、国体後開催される全国身体障がい者スポーツ大会の開催などが挙げられ、今日の国内における障がい者スポーツの普及・振興に大きな遺産となっています。これからは、スポーツの捉え方、大会の捉え方も変わっていくだろうといわれており、「共生社会」という言葉を使いながら、多くの方をスポーツの世界に呼びこみ、良い形にしていこうとしています。これからはスポーツを「楽しむ」という環境づくりが大切なのではないかと思っています。

ただ、病気や怪我の治療後、リハビリテーション等の一環としてスポーツをしたり、或いは施設の中の生活の一部としてスポーツをしたりしていた人が、近年、退所や退院して家庭に戻る期間が、非常に短くなってきています。家庭に戻るまでにスポーツを体験するとか、スポーツへの動機づけをするとかができないことが課題です。

● スポーツ活動を支援する際に考慮しなければならないこと

障がい者の方が、生活するうえで、一人で飲食できるかどうか。また、排泄の処理が一人でできるかという課題。そしてそのようなトイレがあるかという課題。着替えることも一人でできるかどうか。移動も自分でできるか。車の運転ができる人と送り迎えしてもらわないといけない人といろいろいます。そういう人たちの程度によって、支援の仕方が全部違ってきます。施設ばかりバリアフリーにしても、そこに障がい者が辿りつけないという現実があります。このような課題に対する対策は、ヒトなのかモノなのか、カネなのかということになります。



スポーツ・レクリエーション活動を行う以前に考慮しなければならないことがある

障がい者スポーツもそうですが、これからの高齢化社会に向けては、身近なところでレクリエーションスポーツが楽しめる環境を創っていくことが大事だろなと思います。おカネをかけてまで遠い所に行って、施設で何かをしようということにはならないのではないかと思っています。

人に支援してもらう時間が多ければ多いほど、障がい者の自由な時間が減るという解釈をしています。少しでも自分の時間を作るためには少しでも自分でできることを増やすことと伝えています。

そういうことから、少しでも多くの方々に、理解していただき、身近な地域で活動できる場所を確保できるよう環境の改善を関係者等に働きかけています。

しかし、都内にあるナショナルトレーニングセンターは、障がい者アストリートへの利用が可能となり、障がい者優先のトレーニングセンターが建設中ですが、周辺の信号機には視覚障がい者用の音声アナウンスがないため、視覚障がい者が信号を渡れない状況です。スポーツ施設をバリアフリーにしてもその周辺の環境の整備も含め計画していかなければ、障がい者が利用できる環境とは言えないのです。

共生社会の実現と言われていますが、なかなか共生には至っていないのではないかと感じます。日常で、障がい者の方々のイメージを持ってもらうと少し、環境が良くなるのではないかと感じます。

最終的には、障がい者がスポーツを行う場合のキーワードとしてお願いしたいことは、「衣・食・住」という言葉から、「衣」というのは、自分で身だしなみ等を整えることができるか否か、「食」は、食事や水分の摂取、それと排泄行為。「住」は移動という観点から、障がい者がスポーツをする場面に行くまでの状況を理解し、活動を具現化するために必要なものとして、「ヒト・モノ・カネ」がどの程度必要かを考えて、最終的にスポーツ活動の場面に導いていくことが大事なのだろうと思います。

「衣･食･住」と「ヒト･モノ･カネ」というキーワードは、いつも考えながらバランスをとっていかないといけないと思います。

最後に、先ずは知って頂きたいということ。何かできることがあったら、小さいことでも結構ですから一人一人が少しでも変わっていってもらえると助かるかなと思います。それが最終的に大きな力になり、大きな環境の変化につながると思います。是非、今後ともご理解とご協力をお願いしたいと思います。